

# 「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter

(第2期第2号—通巻第15号—)

## 投稿論文 1

山口重克

(東京大学名誉教 [yamshige32@yahoo.co.jp](mailto:yamshige32@yahoo.co.jp))

## 宇野弘蔵の「過渡期」説について

『宇野理論を現代にどう活かすか Working Paper Series』

2-2-3

[http://www.unotheory.org/news\\_II\\_2](http://www.unotheory.org/news_II_2)

「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter  
事務局：東京都練馬区豊玉上 1-26-1 武蔵大学 横川信治  
電話：03-5984-3764 Fax：03-3991-1198  
E-mail:[contact@unotheory.org](mailto:contact@unotheory.org)  
ホームページ <http://www.unotheory.org>

## 要旨

宇野弘蔵の段階論の著作は『経済政策論』（弘文堂刊）であるが、第1版は1954年に出版され、その改訂版が1971年に出版された。そのいずれにおいても、最後の段階である「帝国主義段階」は第一次大戦前で終わっている。そして第一次大戦後が段階論でどう扱われるのかについては、旧版では巻末の註で簡単に論及され、改訂版ではその巻末の「補記」で旧版の註の削除と旧版の考え方が変わった旨の簡単な説明が行われた。私の理解では、第一次大戦後について、宇野は旧版では社会主義への過渡期説に傾いていたが、改訂版でその考え方を放棄したと思われるのであるが、一般にはむしろ改訂版で宇野は過渡期説を明確にしたと解釈されているようである。本稿はこの解釈が間違っていることを検証しようとするものである。また、同時に、宇野には二つの発展段階論が並存しており、生産様式の発展段階論の方で過渡期論が述べられたのではないかという推測を示した。

宇野が「第一次大戦後＝社会主義への過渡期」説を主張したという宇野解釈が広く行われるようになったのには、宇野の『経済政策論 改訂版』（1971年、弘文堂）の巻末の「補記」の読み方に一因があるように思われる。

この改訂版出版直後に行われた『情況』編集部によるインタビューでの宇野の発言（『情況』1971年5月号、所載、『資本論に学ぶ』1975年、東京大学出版会、に再録。178頁以下）にそのヒントがあるかもしれないと思い、以下でこの記録と上記の「補記」を少し丁寧に読んで見ることにする。

このインタビューは3部に分かれていて、先の解釈に影響を与えたかもしれないと思われる発言はその第3部のものである。編集部がつけたと思われるその表題が「過渡期としての世界と現状分析」となっているのも、この解釈を助けたかもしれないという推測もできるが、この第3部での宇野の発言ないしそこで扱われている「補記」の内容にはやや不分明なところがあるので、私はこれまで、この発言と「補記」はあえて無視することにしてきた。無視しても宇野の段階論の解釈にとくに問題は生じないと思えたからである。

しかし私が、過日出版された『宇野理論の現在と論点』（2010年、社会評論社）で、宇野は「過渡期」説ではないと述べたことに関連して、この『情況』誌のインタビューと上記の「補記」についての私の意見を聞かれる機会があったので、ここでこれらについての私の考えを少し整理して述べることにしたい。

まず、この問題に関連があると思われるインタビューでの編集部の質問と宇野の回答を以下に引用する。微妙な問題があるので、少し長くなるが、両方とも全文を掲げることにする。

編集部の質問は、「こんど先生は『経済政策論』の改訂版をお出しになったわけですが、新しく補記を加えられ、その補記の中で、第一次大戦以降の〈資本主義の発展が段階論的規定をなすのに如何なる程度にまで役立てられるかは極めて興味ある、重要な問題であるが、疑問として残しておきたい〉という注をはずして、〈むしろ現状分析としての世界経済論の課題をなす〉とされていますが、いままで断定をためらっておられた理由はどういうことですか」（同上書、179頁）というものである。

これに対して宇野は、「その理由というのは、現在の植民地解放と、それから社会主義国が沢山できて、それが資本主義国と戦争をするということにまでなってきたという事実によるのです。ここまでくれば、これはもう資本主義の時代といえないのではないか、つまり段階論として区別しなければならないような問題じゃないんじゃないかということです」（同上頁）と回答している。

その回答に、編集部がさらに「そのところをもう少し説明して下さい」と質問したのに対し、「段階論ではないということだよ。つまり、過渡期に段階論があるかな」（同上）と続けている。

このやりとりを普通に読めば、編集部は1954年版の『経済政策論』（以下では「旧版」と呼ぶことにする）の巻末「結語」の注で、宇野が「第一次大戦以降の資本主義の発展が段階論的規定をなすのに如何なる程度にまで役立てられるか」という問題を「疑問として残した」、つまりいままで断定をためらってきたのはどうしてかを聞いているのであるから、宇野がインタビューでその「理由」として答えているのは、第一次大戦以降の資本主義の発展は段階論的規定に役立てられるのかどうかという問題を旧版の時点では「疑問として残した」理由、いいかえれば、新たな段階論的規定には役立てられないかもしれないと考えた理由であると解釈できよう。つまり旧版の時点では、宇野はそこで述べられている植民地解放とか社会主義諸国云々という事実から、第一次大戦後はもはや資本主義の時代とはいえないかもしれない、したがって資本主義の新しい段階と規定することはできないかもしれないと思っていたといっているわけである。

なお、編集部は質問の中で、宇野が改訂版では、旧版の「注をはずして、〈むしろ現状分析としての世界経済論の課題をなす〉とされていますが、」といっているが、この「むしろ現状分析としての世界経済論の課題をなす」というのは、実は旧版の巻末「結語」の注の中の文章である。すなわち、宇野は、編集部が引用していた「疑問として残しておきたい」という文章に続けて次のようにいっている。「1917年のロシア革命後の世界経済の研究は、資本主義の典型的発展段階の規定を与える段階論よりも、むしろ現状分析としての世界経済論の課題ではないかとも考えられるのである」（旧版、231頁）。

要するに、これらから解釈できることは、宇野は、旧版（54年）の時点では、第一次大戦後の資本主義は新しい段階論の対象にはならないのではないかと、むしろ社会主義への過渡期として、現状分析としての世界経済論の対象をなすのではないかと、考えていたということであろう。

しかし、一般には、宇野がこのように考えるようになったのは1971年の改訂版以降だと解釈されているように思われる。あるいは改訂版の時点で、旧版の注の考え方が改めて確認されたと解釈されているのかもしれない。こうして問題は、改訂版の時点でも、旧版の注で述べられていたような考えが残っているのか、あるいは改訂版では旧版の「疑問」は解消されていて、過渡期論は変更されているのか、ということになる。

そこで、一般に宇野の「第一次大戦後＝過渡期」説なるものの出典であると理解されているように思われる改訂版の「補記—第一次世界大戦後の資本主義の発展について」（同上書、263頁～）の冒頭部分を以下に引用して、検討することにしよう。上で引用した文章も含まれているが、重複をいとわず、ここでもとりあえず全文を引用する。

「旧版では〈結語〉の中の〈段階論はしかし資本主義の発展の歴史そのものではない〉

という一句に次のような註をつけていた。すなわち、〈本書は見られる通りその対象の範囲を第一次大戦までの資本主義の発展段階に限定している。その後の資本主義の発展が段階的規定をなすのに如何なる程度にまで役立てられるかは極めて興味ある、重要な問題であるが、疑問として残しておきたい。1917年のロシア革命後の世界経済の研究は、資本主義の典型的発展段階の規定を与える段階論よりも、むしろ現状分析としての世界経済論の課題ではないかとも考えられるのである。〉と。しかし、この改訂版ではこの註記を削除した。これは当時なお私には段階論としての経済政策論に曖昧なる考えが残っていたのである。事実、第二次世界大戦はもはや単なる帝国主義戦争とってよいか、どうかに迷っていたし、その後のアジア・アフリカの旧来の植民地の独立、中国・北朝鮮・東欧諸国等における社会主義政権がどういふ発展を示すか、ということにも、またソ連における社会主義経済の建設にどういふ成果が見られるのか、というようなことにも全く知識を持っていない私にとっては、何とも確言できなかつたからである。しかしその後の資本主義諸国の発展は顕著なるものを見せながら、それはこれらの社会主義諸国の建設を阻止するものではなかつたようであり、しかもその発展に新たな段階を画するものがあるとはいえないのである。結局、段階論としての政策論に新たな展開を規定することはできないのであって、〈その対象範囲を…〉の〈限定〉は不必要のことであつた。〈むしろ現状分析としての世界経済論の課題〉をなすものとしてよかつたと思う。」(同書、263～264頁)

ここの「確言できなかつたからである」に続く「しかし」以下の文章をどう読むかが、宇野が過渡期説だつたかどうかの判断を左右するようである。

文章の流れからいうと、旧版当時は段階論としての政策論について曖昧な考えが残っていた、あるいは迷いがあつた、とってその理由を述べたあと、「しかし」といつているのであるから、「その後の資本主義の発展」をみて、迷いが吹っ切れて、「その発展に新たな段階を画するものがあるとはいえない」、「段階論としての政策論に新たな展開を規定することはできない」、したがつて従来段階論の「対象範囲」を大戦前に「限定」する必要はないという結論に達し、新しい段階として規定することを止めた、というように読むのが素直な読み方であろう。

この結論について、宇野はここで、その後の資本主義は従来宇野の段階論が適用可能な資本主義だという結論に達した、と読むことができると私は考えているが、人によっては、54年時点の疑問、迷い、は正しかつたのであり、その後の資本主義は従来段階論にはなじまない、過渡期としての資本主義だという結論に達したのだ、という読み方もあるかもしれない。

しかし、この読み方には無理があると私は思う。宇野は、たとえば1967年刊の『現代経済学演習講座 新訂《経済原論》』(青林書院新社)の中で、「いわゆる国家独占資本主義は、段階論的にはどのように規定されるか」という「問題」に対して、次のように「解答」している。これも全文引用しよう。

「段階論的規定は、商人資本・産業資本・金融資本の3つの資本の型を基準にして与えられるのであるが、いわゆる国家独占資本主義が、この資本の型に対してとくに新たな資本の型を展開するものとして規定されているとは考えられない。したがつて段階論的には、金融資本をもって十分に分析されるものではないかと思う。ただ第一次世界大戦後はロシア革命によるソヴィエトが出現し、第二次世界大戦後は中共その他の共産圏の拡大によつ

て、もはやたんなる資本主義の帝国主義時代とはいえない関係を展開しているし、また政策にも、たとえば対内的にはインフレ的財政投融资が重要となり、対外的には援助政策など新しい方策がとられてきたので、これを従来の金融資本の段階論的規定に入れて考察することが困難となったために、国家独占資本主義の時代というようなことがいわれるようになったのではないかと思う。しかしもともと、段階論的規定は、現状分析にさいして、そういう機械的適用にあてられるべきものではない。それは原理論の抽象的な基本的概念を持って現状を分析するという場合に、その前提をなす純粋の資本主義社会が分析の対象をなす現状とはつねに異なっているために必要とされる、いわば補助概念をなすものであって、たとえば現実の資本を原理論の資本概念におしこみえないのと同様に、段階論的概念を持って現実の資本をかたづけるわけにはゆかない。ただ原理論の基本的規定で明らかにしえない面を段階論的に歴史的な概念をもって補足的に解明されると、現状の特殊性が科学的に明らかになるというわけである。国家独占資本主義というのは、そういう点から段階論的に新しい時代というよりは金融資本段階の一時期とでも考えるべきではないかと思う」（上掲書、17～18頁。『宇野弘蔵著作集第2巻』1973年182～3頁に再録）。

ここにはいわゆる国家独占資本主義と段階論との関係が実にコンパクトに、明快に述べられているとあってよい。これをみる限りでは、おそくとも1967年の時点では、明らかに54年段階の疑問は吹っ切れていると見てよいだろう。

旧版と改訂版の間で、第一次大戦後の資本主義は金融資本段階の資本主義であるという意味の発言をしていると読めるものとしては、このほかにも、たとえば1963年に行われた宇野の報告とそれをめぐる質疑の記録である「経済学の方法について」（『《資本論》と私』2008年、御茶ノ水書房、所収）がある。これも引用しておこう。

「その[いまやられている現代資本主義論の]議論から何か新しい資本概念でも出てきているのだろうか。…なにか後進国が出ると、いまの後進国では新しい段階論ができるんじゃないか、また、たとえば資本主義も変わってきているので、現代資本主義として新しい段階論ができるんじゃないか、という議論があるようですが、あるいはできるかもしれないのですけれども、なにもあたらしい資本形態が出ているわけじゃないから、段階論のときにアメリカなりイギリスなりによってやった以上のことをやらなければいけないということはないんじゃないかと考えるんですが、どうでしょうか」（同上書、238～9頁）。

上掲の『演習講座』の発言時にかつての疑問が吹っ切れているとすれば、その4年後の改訂版で、再び54年段階の疑問が復活して、過渡期といえるかもしれないという考えに傾いたとはとても考えられないとあってよいであろう。

実際また、『情況』のインタビューで宇野が続いて述べている国家独占資本主義論の論じ方をみても、あるいはそれに先だって行われた『日本読書新聞』のインタビュー（1971年3月29日号、所載。前出『資本論に学ぶ』1975年の「国家独占資本主義をめぐって」として再録）をみても、第一次大戦以後の資本主義の政策の論じ方は金融資本を前提にして、金融資本の政策か否かを論じることになっている。すなわち第一次大戦以後の資本主義は金融資本段階の資本主義という前提で論じられているのであり、段階論の埒外の問題とされているわけではない。

なお、埒外の問題という言い方と似た言い方として、宇野は段階論を第一次大戦で打ち切っているという言い方がされている場合があるが、打ち切っているという言い方で述べ

られている解釈は必ずしも意味がはっきりしない。第一次大戦後は新しい段階としては規定できない、つまり典型的な段階規定は第一次大戦前までの資本主義についてしか与えられない、典型的な段階規定は第一次大戦前で打ち切られている、とも読めるもので、第一次大戦後が金融資本段階の一時期であることを必ずしも排除する言い方ではない。したがって、段階論の埒外であるという言い方とは同列には扱えないものであるといえよう。

もう一度整理しよう。ポイントは問題の「補記」で宇野が、改訂版では旧版の例の註記を「削除」したと述べているのをどう読むかであるといっている。この註記で宇野は、第一次大戦後の資本主義の発展を新たな典型的発展段階として規定できるかどうかという問題は疑問として残しておきたいといっている、過渡期説に傾いているようなことをいっていたわけであるが、この註を削除したというのは、この疑問を一応解決したということであろう。ではどのように解決したのか。考えられる解決としては、(1) 新たな発展段階として規定できるという結論に達した、(2) 従来の段階論を前提にして、つまり金融資本論を前提にして分析されるべき問題だという結論に達した、(3) 第一次大戦後の資本主義の発展は、新旧いずれの段階論も前提にしないで、過渡期の世界経済としての現状分析の対象とすべきだという結論に達した、という3つの解決の仕方があるだろうが、ここまでの検討の結果として、宇野は(2)の結論に達して註の「削除」を決めたと解釈することができるであろう。

以上の解釈についてはほとんど異論の余地はないであろうと思うが、解釈の問題としてほかに2つほど言及しておく必要があると思われる問題がある。

一つは、たとえば旧版の註で「ロシア革命後の世界経済の研究は、資本主義の典型的発展段階の規定を与える段階論よりも、むしろ現状分析としての世界経済論の課題ではないか」(前出)と述べ、また改訂版の補記で「第一次大戦後の資本主義の発展は、それによって資本主義の世界史的発展の段階論的规定を与えられるものとしてではなく、社会主義に対立する資本主義として、いいかえれば世界経済論としての現状分析の対象をなすものとしなければならない」(前出)と述べていることの解釈の問題である。

この二つは似ているが、このうちの旧版の注の方は、上述のように過渡期説に傾いていた時期の言説の一部であるから、第一次大戦後の世界経済の研究は過渡期における現状分析としての世界経済論の課題であると考えていたと解釈することにあまり問題はなかろう。これにたいして、後者の改訂版の補記の方は、先程来の、補記では宇野は、第一次大戦後の資本主義の発展も金融資本段階の一時期の問題であると考えようになっていたという解釈を前提にすれば、植民地解放とか多くの社会主義諸国の建設といった宇野を悩ませた問題は、段階論的规定だけでは片付けるわけにはゆかない現実の問題であって、この分析は金融資本段階論を媒介にした現状分析論の中の世界経済論の課題であるといっていると読むことにほとんど問題はないであろう。これを、この時期の世界経済は、段階論の媒介なしに直接に(原理論から直接に、あるいは原理論の媒介もなしに)現状分析の対象にするべきだと、宇野が主張していると解釈することは到底できない相談であろう。

もう一つは、これよりは少し厄介な問題であるが、たとえば先ほど紹介した1963年の質疑の記録である「経済学の方法について」の中に、次のような発言がある。

『経済政策論』の終わりのところで、これは僕は遠慮して言ったのですけれども、もう世界史的には資本主義の段階を、やるときではないのではなかろうかということを行った

のですね。社会主義の段階を世界史的にはやってもいいと思うのですが、どっちになるのかな。…」(前出『《資本論》と私』、243頁)。

また、それに続けて、出席者との間で次のような質疑応答がある。

「資本主義の段階というよりは、むしろ世界史的には社会主義の段階だと…。」

「ええ、まあ段階論としてはですね。少しラジカルすぎるかもしれないけれども…。しかし社会主義の段階といっても、これは大変なんですね。…」(同上)。

この発言は旧版刊行の9年後のもので、その少し前では、先にも引用したが、当時の現代資本主義について、金融資本概念によりながら現状分析をやるのではないかと、つまり、金融資本段階と見てよいのではないかという意味の発言をしているのであるが、ここの発言は、過渡期説的のようにも見える。つまり旧版のときの疑問ないし迷いがまだ残っていて、吹っ切れていないようにも見える。

また、改訂版出版直後の1971年3月29日の『日本読書新聞』のインタビュー(これは先に紹介した『情況』誌のインタビューの少し前のもの)の発言の中で、編集部「第一次大戦後の資本主義の歴史的規定について…」という質問に対して、「世界史的には社会主義の初期とっていいでしょうね」(前出『《資本論》に学ぶ』195頁)といている。

これらをどう理解すればよいかであるが、これらは明らかに「第一次大戦後の資本主義＝社会主義の初期」説だといってよい発言であろう。しかし、他面で、以上で確認したように、この段階は金融資本段階であり、第一次大戦後の資本主義は「金融資本段階の一時期」の資本主義だと考えるべきだろうといているのであるから、この発言を根拠に、宇野はこの時期を段階論の埒外に置いたという宇野解釈が間違いであることも確かであろう。それではどう解釈すればよいかといえば、あくまで金融資本段階の中の一時期ではあるが、それが同時に世界史的には社会主義の初期だという理解だろうと解釈する以外にない。資本主義の発展段階論と世界史の発展段階論という二つの段階論を並列させているわけであり、後者の世界史的な体制間の段階論、唯物史観にいわゆる生産様式の発展段階論から見ると、資本主義の金融資本段階の1時期としての現代は社会主義の初期と重なっているといているのであろう。したがって、この「社会主義の初期」発言は、理論的な分析に基づく発言というよりも、宇野のイデオロギーの発現としての発言であると解すべきものであろうと思われる。

宇野を批判ないし誹謗するためには、宇野の理解を正しく解釈することが大前提であろう。以上はとりあえず、現代と3段階論の関係についての私の宇野理論解釈を述べたものである。この宇野理論が正しい議論かどうか、とくに21世紀の現代を3段階論でどう考えるかはまた別の問題である。

[論文受領日：2010年9月29日]